

# PHD LETTER

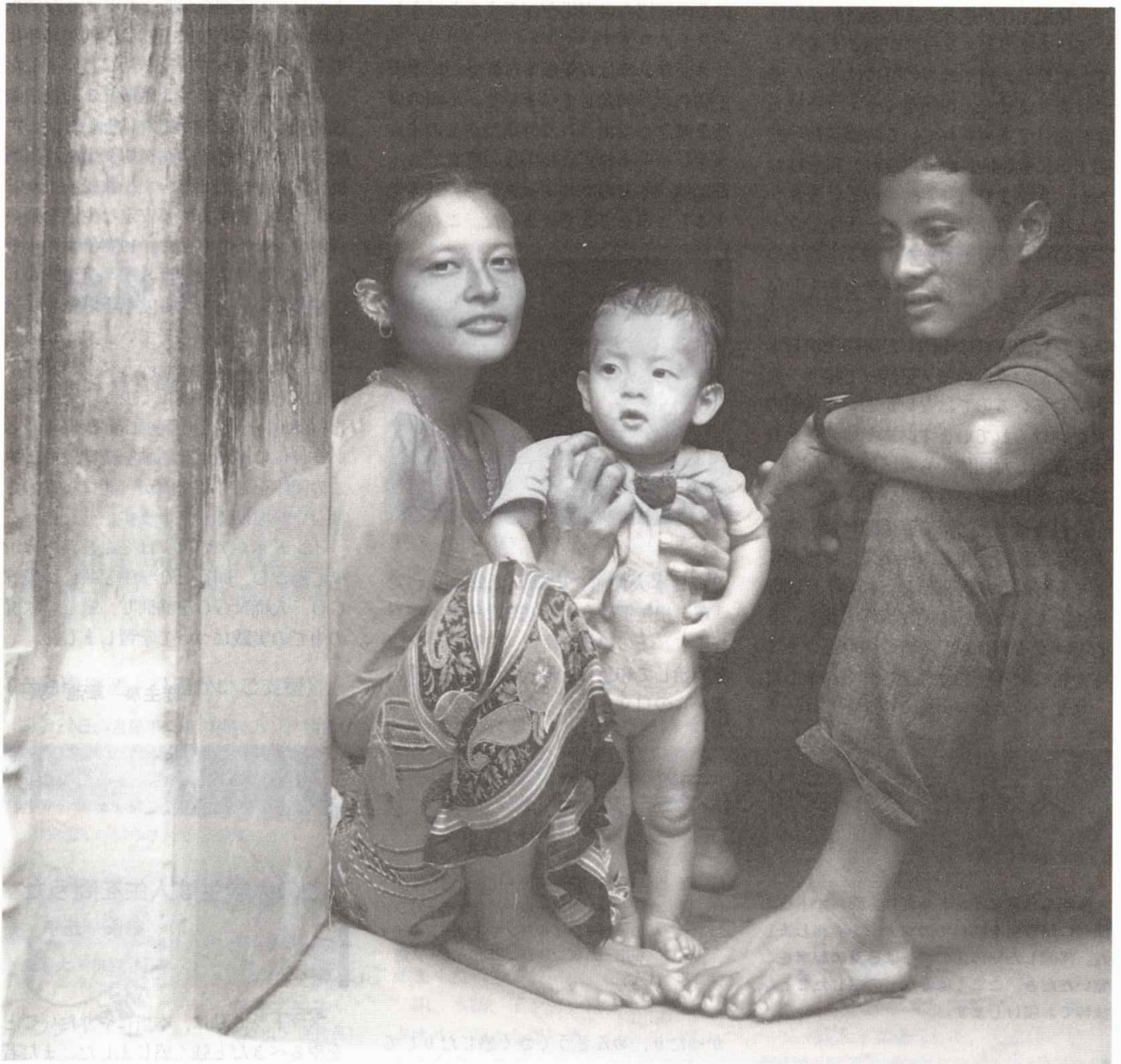
## 53

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1994・12

- スマトラスタディツアーレポート ..... 2・3P
- 帰国研修生報告 ..... 6P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行: 財団法人PHD協会  
編集人: 草地 賢一  
住所: 〒650 神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202  
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867  
郵便振替: 01110-6-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会  
定 価: 100円



ネパール・カブレ、ジュディガオン 撮影/北原葉子

山越え、崖を登り、やっと着いた村  
お父さんは、しばらくたての水牛の乳で  
お母さんはできたての料理で  
子どもは珍しいものをみる目と  
はにかんだ笑顔で迎えてくれた  
また行きたいな、また会いたいね

### 草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

8月から9月にかけてビルマ（ミャンマー）、スリランカ、東マレーシア・サラワク、インドネシア・ジャカルタを訪ねました。

ビルマにはウィン君やムームー、トゥンティン君のホストファミリー、研修指導者を中心に16人で出かけました。

一見民主化が進み、また経済が活気づいているようなニュースが聞こえています。しかし、村や地方の町にはそんな感じはありません。1996年ミャンマー観光年に向けて進められている幹線道路の拡張工事に強制的に駆り出され、賃金はおろか、食事まで自弁させられているような人権抑圧の状況が続いています。ウィン君の村にも労働者狩りが来ると言うので該当しそうな若者が一時身をかくしたとか。

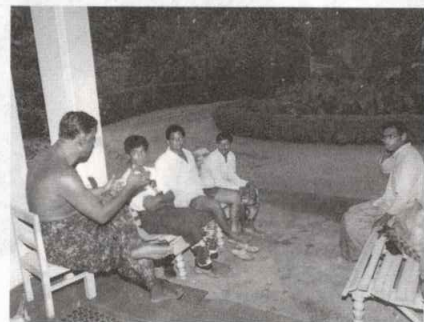
また村の中では帰国した研修生が日本から多額のカネやモノを持って帰り一人占めしているのではないかという羨望の目が向けられています。また研修生を日本に推薦した団体から帰国後その団体へ感謝の寄附を求められているとか。

これらは当事者から直接聞いたものもあれば間接の情報もあります。いずれにしても極端な状況下におかれると「国際交流」も一つの特権的な情報と化し、それをめぐる利権がでてくるのだということ。特にビルマでは痛感させられました。スリランカからジャカルタまでは、2

## 池づくりが具体化へ——スリランカ

人の大学生が同行しました。1、2年前から職員の海外出張を少人数の人々に公開し、NGOスタッフの現地での活動を見てもらうようにしています。この旅を通して、将来国際協力活動により深く関わろうとする人々が学び、また、場合によってはマスメディアの人々が、最先端の草の根協力の現場をルポするというケースもあります。

スリランカは17年振りに野党が総選挙で勝利し、興奮していました。不測の事態を懸念して出された外出禁止令の中、ボヤワラーナ村では40年来の懸案であった溜池づくりのプロジェクトが、具体化するところまできていました。これは村



ボヤワラーナ村、ミーティング風景。

人が日本大使館に申請して認められた「草の根無償資金」が基になって実現されます。この無償資金は、PHDが交流を開始して10年目、帰った研修生が草の根からの自立へ向かう条件がよりよくな

るように封建的な地主制度を守る人々への牽制になればと思っで紹介したものです。

池が完成するまでに水の分配をめぐる公正さが保証される水利委員会、土地をもたない従って水の恩恵を受けない貧しい人々にも、例えば養魚プロジェクトのようなもので利益が生まれるような約束とか、さまざまな民主的な活動が具体化することを願って村長と話し合いました。

東マレーシアには3年振り3回目の調査旅行ということで出かけました。この地域の熱帯雨林の60%が切り出され川が更に汚れ、水辺で暮らす少数民族イバンの人々は、ますます不安定な生活を強いられるようになってきた。1996年頃をめぐりにこのような人々のコミュニティーから定着農業の考え方や方法を学ぶために研修生を招くことを考えています。このイバンのコミュニティーの人々の自立のために、内部分裂を超えて少し安定してきたSCS (Society of Christian Service) というNGOが地道な活動を続けています。この団体を通じて交流が可能になるのではないかと期待しています。

インドネシアでは、ほとんどジャカルタで過ごし、同行した学生と共に環境NGO、人権NGOを訪問し、厳しい状況の中での実践について学習しました。

総主事 草池 賢一

## スマトラスタディツアー報告

今年も8月にインドネシア、西スマトラの漁村に研修生を訪ねてのツアーを実施しました。帰国した研修生の様子は6頁の記事をご覧ください、ここでは参加者の感じたことを抜粋でお届けします。

### 高校生として考えた

三上 博

(兵庫・稲美町 高校生)

出会った小・中学生に学校は楽しいかと聞くとみんな楽しいとの返事。日本は教育環境に恵まれていて、学校に行くのは当たり前のように感じているが、勉強のできる環境にあることをもっと感謝しなければいけないと思った。授業を聞か

日程 94年8月19日～28日・10泊11日  
行程 大阪ーシンガポールーバダシ市ーパシルバルー村ーアイルバングス村ープキティンギ市ーバダシ市ーシンガポールー大阪  
参加者 11人

かったり、めんどくさく感じたりしていた自分が情けなく思えた。

### 中学生も考えた

徳永久仁子

(奈良市・中学生)

パシルバルー村は良い所だ。しかし、海のゴミにはショックを受けた。海をゴミ捨て場に、そういう所はあまり日本を見習わなくて欲しいもんです。

### この大学生は人生を問うた

徳永 元子

(札幌市・大学生)

スマトラで私は、本当にやりたいことをやるべきだと強く感じました。また若いのに、どうして妥協しようとしていたのだろうと思いました。私の人生、どう変わるのか、変わっていくのか、変えられるのか、さっぱりわかりませんが、今後ともよろしくお願ひします。

### 研修生の皆さんへ

平井 裕子

(尼崎市・公務員)

「本当にありがとう。皆さんと村の人々の温かい心遣いは決して忘れません。村での生活の中で私は日本がすでに失ってしまった「良いもの」がたくさん残っていることに気づきました。日本ではここを病む人が増えています。何が本当のしあわせなのでしょう。日本はインドネシアにたくさんの援助をしていますが、本当の援助が必要なのは日本の方ではないかと思えるのです。」

### 栄養を学ぶ大学生は考察する

西村 優子

(京都市・大学生/研修生滞在家中)

アイルバングスの診療所で話をききました。ここでは治療だけでなく、衛生、栄養指導を行っています。しかし理解してくれる人、しようとする人、しようとしていない人、できない人と様々で、その実行まで到達できないのが現状のようです。学校でも指導を行っているようですが、子供に説明しても家族の理解までは得られない。指導内容以前に、どう理解を促すかという教育上の問題が大きいと思います。研修生の人たちも日本で学んだことを実行するのは難しいのだと思います。しかし改善しようとする人がいて、その努力が続けられたら、いつかきっとみんなの理解が得られるようになると思います。



アイルバングス村の交流会。ラッドさんのお父さんのお話を、ハスマヤニさんが通訳。

### 青年の主張

芥川温之

(大学生/福島市・研修生滞在家中)

NGOにかかわる人たちは、何のための活動かしっかりと把握しておく必要がある。それは日本のためである。「日本の将来のためには、君達との友好関係が必要不可欠なんだ、だから援助してるん

### ちがう見方に触れる

美木 朋子

(岩手・滝沢村・看護短大生)

ハスマヤニさんの家に着いて驚いたのは居間の外に面した側がガラス張りになっていることでした。私達が居る間、珍しさと格好の暇つぶしになるために村の人達が外にいっぱい集まります。「こんな外から見える家だったらイヤじゃないの」と尋ねると「外から見えない家は良くない。外から見えないということは中からも見える。外で泣いている人がいれば慰めにいけるし、逆に家の中でケンカが起きれば、外に行く人が止めにきてくれる」と日本では考えられない感覚の答えがハスマヤニさんから返ってきました。しかし彼女も日本から村に帰ってきたときは、おせっかいと感じたり、うるさく思ったこともあったそうです。

ビニールがあること、使うことは当たり前で、いらなくなれば、今までどおりに生ゴミのように捨てれば良いんだ、他と区別しないといけなくて聞いたこともないもってかんじなのだろうか。住民の処理能力や認識が発達する前に、化学物質が生活の中に入り込んでしまっている。便利さの裏側にある負の部分を知り、それにどう対処するのか村の発展における鍵の一つだと思う。

### 帰った研修生にあって考えること

船田 昭信

(研修生滞在家中・高砂市・会社員)

私が研修生に対して期待していたことは、彼等が村の人たちと一緒にあって、村の生活を少しでも病気や貧困のないものにして行くということでした。しかし実際に彼らの村で感じたことは、私の思いを押しつけることは決していいことではないということでした。日本での生活の部分を忘れて、技術や仲間作りの部分だけおしつけることはどう考えても不可能ではないか。外国との接触の少ない村で日本人と言葉が交わされる彼らは私達と村の人を結ぶ大事な存在として村の人の目に映っていることでしょう。

私たちは焦ってはいけません。結論を彼らに選択させる事も必要ですし、彼らがだす結論がどの様なものでも、それはそれでとめていく覚悟をしなければ本当の援助にはならないのではないかと。

### 村の漁業規模から思うこと

青木 三男

(姫路市・会社員)

パシルバルーでは沖合1キロ程に小船をだして魚を獲って生活している。日本に戻ってからテレビで米加タラ戦争というニュースを見た。カナダではタラ保護のため漁を禁じているが、その沖の公海でアメリカの漁船が操業しており、問題化しているものだった。私は公海上の漁獲量も規制したらよいと思っている。自国の利益だけ、自国民の食糧だけ求めて、公海上だからといって世界中どこでも行って魚を獲りつくしていいものではないと思っている。魚には二百カイリもなにもあったものではない。海岸沿いで細々と漁をする人々に与える影響は大きいのであるにちがいないはずだから。

### 村のビニール、土にかえらず

井倉 麻紀

(奈良市・大学生)

ふたつの村を訪ねて、やっぱりゴミの多さが気になった。目立つのはビニール製のもので至るところに散らばっていた。

研修も後半に入り、3人の研修生はそれぞれのペースで元気に学んでいます。今回の研修生レポートは、ご指導いただいた方々に書いていただきました。

### ルークさん (ソロモン)

中川克敏氏宅・岩根英則氏宅・日高久志氏宅/瑞穂アジア塾(島根・川本町/瑞穂町)～坂本登氏宅(兵庫・出石町)～安達一博氏宅(豊岡市)～東日本研修旅行(関東・東海・北陸地方)

#### 「ルークとの2週間」

中川克敏さん/今回初めて研修生を受け入れて下さった方。ご家族で農業を営んでいます。ルークさんによれば、川本町が一番有名な人だそうです。

私は山陰の山裏のわずかの棚田と昔の鉄穴流し(砂鉄とり)の跡地らしい傾斜畑で2頭の和牛を飼い乍ら地元の街に野菜を卸して生計をたてている、山下惣一氏言うところの、日本一小さい専業農家です。

全てが小規模であるが故にアジアからの農業研修生にはいくらか為になるのではなからうか、とこれまでに何人かのホームステイを受け入れてきました。

9月10日からソロモンのルークを迎え、秋の農作業の一切を共にこなしてきました。彼はこれまでに兵庫県の有機農業経営体で過ごしており、一通り全てのことを見聞きしている様子でした。私には日本の農家での生活、農作業に、彼が大きな違和感を覚えている様には見えませんでした。基本的に耕種農業はどこへ行っても大した違いはないと言うことでしょうか。

もしも私が彼に教えることがあったとしたら、1つには作業の進め方でしょう。私は大型機械は1つもありませんし、単品の大きな作物もありません。手作業が中心ですが、私は彼の2倍のスピードと効率で物事を片付けていくことが出来ます。これまでの道具の使い方や作業手順での彼のやり方はこれから先どこまで有効でしょうか。

ソロモンでも近い将来には化学肥料や農薬の使用が不可避となるだろうと思います。ならば有機農業だけが未来を切り開く鍵であるとは考えず、それらを使いこなす能力も求められるのではないのでしょうか。

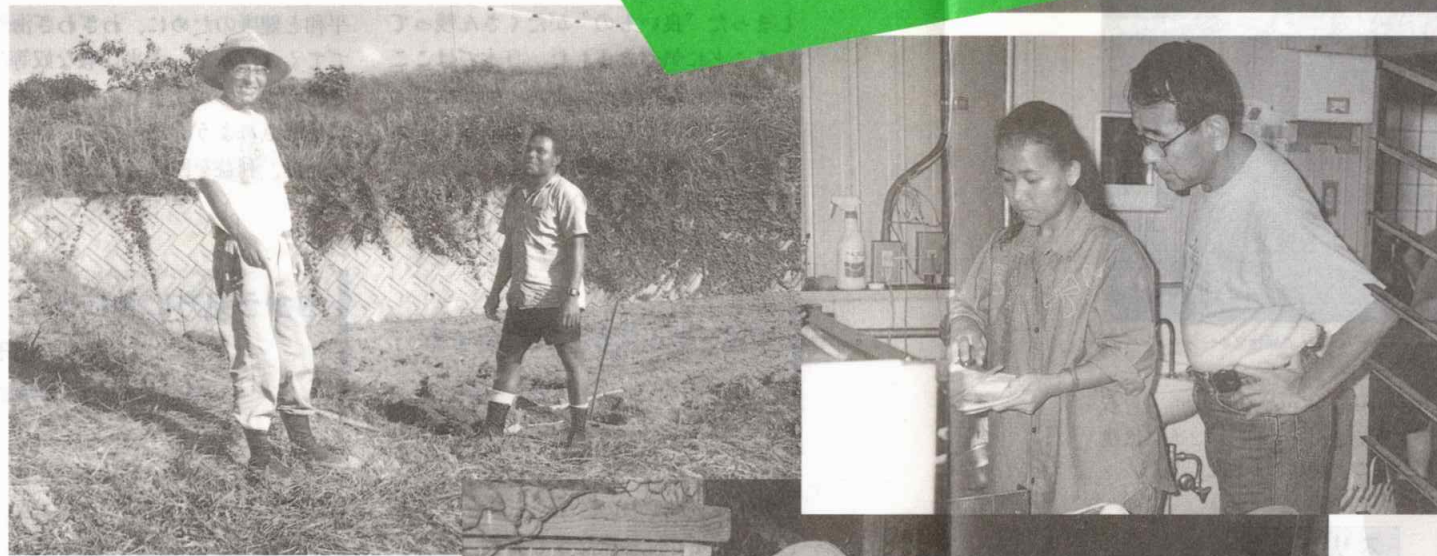
ともかく2週間という日々を楽しく過ごすことが出来たのは、彼の手柄に負うところが少なくありません。明朗で心優しく頭が良く、彼の道徳観の中に南の島の共同体の精神とキリスト教の教えを見たと思います。そして何よりも今、英語の勉強している私には英語が今の世界で持っているコスモポリタン性を深く思い知らされました。

ともかく、2月にもう一度会えるということで、涙なしに神戸へ送ることが出来ました。そして今も彼のことを思い出す毎に彼の地へ思いをはせながら、私の息子の一人となったルーク個人にどれだけ責任が負えるのかなどと考えてしまうのです。

## 研修生レポート

# マイペースで研修進む。

## 第12期研修生



中川さんと畑仕事をするルークさん。



笹間さんの鶏にえさやりをするトンさん。

### トンさん (ビルマ)

笹間政典氏宅(島根・日野町)～中井弘明氏宅(兵庫・市島町)～渡辺省吾氏宅(兵庫・丹南町)～東日本研修旅行(関東・東海・北陸地方)

#### 「どちらが研修指導者か…？」

笹間政典さん/平飼いで養鶏を営むお父さん。その鶏舎は全て手作り、いたるところに工夫が見られ、研修生もそのアイデアに感心しています。

9月初旬、ちょうど稲刈りが忙しくなる頃トンさん我が家へやってきました。目的は養鶏の研修。といっても一日じゅう鶏の世話をしているわけではなく、朝、餌と草をやり、翌日の餌を配合した後は稲刈りや畑仕事をやらせてもらいました。

陽気で働き者のトンさんは2～3日で鶏の世話の要点を覚えてしまい、私が朝寝坊していると先に鶏舎に歩いて働いていることもありました。

三度の食事の後片付けをして食器も洗ってくれるので家内は大喜び、食後寝て新聞を読んでいた私もいかにもぐうたらなようで居心地が悪くなり、しぶしぶ自分の食器だけは自分で台所に持って行くようになりました。

数日後、「お父さんは『のんびり』という言葉をよく使うけどどういう意味ですか」と尋ねられた。「なに!のんびりを知らない?今迄の研修先ではどんな言葉を覚えたんだ?」と聞くと、「じっくり」「いっしょうけんめい」「だたらするな」等々。えらいこっちゃ、こんなことが家の人に知られたら私が一番厄介者だということかばれてしまう。

ビルマの話も沢山聞きました。ウィンさんたちと始めた図書館が「5人以上で集会をしてはいけない」という法律に引っ掛かって中止させられたが、なんとか再開しているとか。軍隊の圧政の下で、こんな活動をやっていくというのは、どれだけ勇気のいることかちょっと想像できません。

法律の網の目をくぐると言っても、無農薬の米を闇で販売したり、どぶろく(密造酒)を作るのはえらい違いでしょう。

少しは研修らしくしようと、本棚の奥で埃をかぶっていた養鶏の本を取り出して来て鶏の話やら、餌の栄養計算等の説明もしましたが、これはトンさんよりも私にとって勉強になりました。

研修も終わりに近付いた頃、ひえだらけの田圃の稲刈りをしている「来年は雑草のない稲作をするぞ」と言う、「来年、草の無い田圃の証写真を送ってください」と言われてしまいました。今に見ておれ!こんな、どちらが研修指導者か分からないような状態でしたが、トンさんのお陰で楽しい3週間を過ごさせていただきました。

尾崎義隆(社長)さんに、がんもどきの作り方を習っているラッドさん。

### ラッドさん (インドネシア)

東出雲町役場・島根県黒木保健所(島根・東出雲町/西ノ島町)～尾崎食品株式会社(神戸市西区)～日本キリスト教保育所同盟各保育所(沖縄・那覇市/宜野湾市/沖縄市他)～東日本研修旅行(関東・東海・北陸地方)

#### 「手づくり豆腐のこだわり研修」

尾崎章江さん/これまで女性の研修生がお世話になっています。国産大豆の仕入れから製造まで、こだわりを持って豆腐づくりに頑張っていると元氣なお母さんです。

10月1日、ラッドが昼すぎやってくる。可愛いあどけなさの残っている少女といった感じ、22才とは思えませんでした。昔のお話にでてくる日本女性ですね。

アジアの人が毎年お豆腐作りにと、PHDが推薦して下さり勉強に来てくれるようになって、私もそれ以上の勉強をさせて頂ける事、ありがたく思っております。言葉はどの人もしっかりしているという事は言うまでもありません。たとえ言葉が通じなくても、ハ-

トで通じる事がいっぱいありました。尾崎食品で作っている豆腐は豆にこだわり、水にこだわり、天然にがりこだわり、味にこだわり、価格にこだわり、こだわり続ける昔の味の豆腐です。

こだわりの豆腐をいつもアジアの人達に優しく教えているのは義隆さんです。自分の国に帰って作れるやり方を指導しています。

ラッドは初めての経験に真剣そのもの、言わずともしっかりノートにメモを取っています。1回よりは2回、2回よりは3回、時間のある限り作る練習をしました。固いのができたり、やわらかいのができたり、おいしかったり、まずかったり、やればやる程難しくなり、奥の深さがわかってくるのがにがり豆腐です。一応豆腐ができるようになったら、おからを油で揚げるクッキーを作りました。豆腐はなまで食べる以外、加工する方法があります。豆腐を絞ってがんもどきを作りました。中身の具は国にある物を使って作る事ができますので、楽しそうに作っていました。

「がんもどきもおからクッキーも国の人はおいしいと言ってくれると思います」とラッドは言ってくれました。

短期間で充分とは言えませんが、これからまたチャンスがあれば、ラッドが村に帰った時、先生になってスムーズに指導するための講座を女性を招いて勉強してみたいと思いました。

まだ22才という若さ、色々な経験が必要とされると思います。私達の出来る事を応援したいと心より思います。

## 第5回日韓農民交流

今年で5回目を迎えるこの交流で、相互にその成果が見えはじめてきました。

毎年お世話になっている氷上郡春日町では、地域でメンバーを歓迎していただき、盛大な交流の場を持つことができました。その中で、将来彼らの農村に訪れ、草の根の相互交流を実現したいとの感想も出てきました。

また、韓国では忠清南道洪城郡で氷上郡市島町の市島有機センターに学んだという堆肥工場の建設が始まり、地域で有機農業に取り組んでいく第一歩が踏み出されました。



有機農業による果樹栽培の説明を受ける。(南淡町、山口勝弘氏宅)

#### 来日メンバー

慶尚南道居昌郡より	田正秀
趙在弘	李東玉
孔基永	李厚根
忠清南道洪城郡より	李繁榮
李炯坤/通訳・団長	編集局長

淡路島モンキーセンター(兵庫・洲本市)～山口勝弘氏宅(兵庫・南淡町)～在日大韓教会大阪教会/在日韓国YMCA関西(大阪・生野区)～渡辺省吾宅(兵庫・丹南町)～中野宗嗣氏宅/氷上高等学校・丹波新聞社(兵庫・春日町)～一色作郎氏宅(兵庫・市島町)～吉田吉彦氏宅(兵庫・氷上町)～兵庫農協共同組合中央会(神戸市)～「食と農をアジアの視点で考える交流会」/飯沼二郎氏・神戸学生青年センター・日本キリスト教団兵庫教区社会部委員会～信長たか子氏～神戸新聞社～保田茂氏(神戸市)

### 学び多い研修

李繁榮(「週刊洪城」編集局長)

有機農業の生産者たちが多くの困難を排して、国民の健康と生命を守り、地球に優しい正しい農業を守り抜くため長い年月取り組んでおられる、その信念と根気に学ぶことが多かった。

10月5日一行の一部は吉田さんの野菜畑で草取りの仕事を手伝った。3人が3時間半

ほど作業をしたが、約100メートルの畝2つだけを終えた。残りの20余りの畝にぼうぼうと生えている雑草はどうして誰か取り除くだろうか。どこでも有機農家の苦労は並大抵のものではない。彼らこそ地の塩なのだという感じを新しくさせられた。

日本の消費者の高い意識にも心うたれた。信長たか子さんの産消提携の講義は有機農業の定着に消費者の意識がいかに大切かを諄々と語っておられた。

モンキーセンターは、工業優先産業社会がもたらす公害の実情を可憐な動物を通じて人類に突きつける厳重な警告で環境問題をめぐる教訓の圧巻であろう。

日本人のなかには韓国語を習い相当の境地に到達した方や、韓国の本や新聞を自由に読みこなす方達がおられるのをあちこちで見かけた。韓国を知ろうと真剣に努めておられる。我々は隣国を知るためどれほどの努力を傾けているだろうか。草地賢一総主事は重ねて強調する。「日本と韓国そして東南アジアの農民がお互いに協力し共生の精神を実現すべきだ」と。

本当にそうだとの自覚を新しくしながら帰路についた。

# 帰国研修生報告

この夏実施のビルマ（ミャンマー）、インドネシア・スマトラ、ネパールへのスタディツアー（およびスリランカへのフォローアップ）の折に、帰国研修生に会うことができました。彼らの現状を報告します。

## スマトラ

**ユリ・タムリンさん** 4期・86年来日

92年には台湾でのリフレッシュコースも行った彼は、パダンにある西スマトラ州漁業振興部を職場とし、地域の漁業開発に取り組んでいます。

**アリ・ムルティムさん** 5期・87年来日

砂浜のため港がなく規模の拡大が難しいパシルバルー村において、近くの川での養殖に活路を見出そうと準備中。

**ハスリ・ペティさん** 6期・88年来日

アイルバンギス村で近海漁業に取り組んでいます。二人目の子供が生まれ、一家の柱としてますます責任重大。

**M・ファイジンさん** 6期・88年来日

パダンで続けていた経済の勉強も終り、日本での経験を生かせる仕事を探しています。町と村の漁業を結ぶ仕事を希望。

**アフナルさん** 6期・88年来日

8月から1年の予定でジャワ島パンドンにある大学に入り、日本語の勉強中。パダンに戻ったらその日本語を生かして、村の発展のために尽くしたいと燃えています。

**サムスアリスさん** 8期・90年来日

パシルバルー村で漁師を続けています。ハエ縄漁に意欲をみせていますが、道具が揃わず未着手。9人目の子が奥さんのお腹の中に。まだ打止めではないとか。

**ハスマヤニさん** 10期・92年来日

父親が既に亡く、長女の彼女は一家の柱です。村では稼ごうとできないのでパダンにでなければならず、日本の研修を省く時間が少なくなってしまうのが目下の彼女の悩みです。

**セニフィタさん** 10期・92年来日

前号巻頭頁でご紹介のように7月結婚。村で帰国後スタートさせた保育所で子供たちを通じて保健衛生を指導中。

## ビルマ

**ティンアンウィンさん** 10期・92年来日

女性のミシン洋裁グループ、図書館、組合等の村の組織化に努力。調整役として相変わらず走りまわっています。



ムームーさんと編物グループのメンバー。

**ムームーさん** 11期・93年来日

女性の編物グループを5人でスタート。このグループを通じて日本で学んだ栄養・衛生の知識を広めていこうと着実な活動ぶり。

**トウンティンさん** 11期・93年来日

自分の田んぼで稲作の技術改良に取り組み、村人の理解を促しています。組合活動も進行中。

## ネパール

**バラト・ビスタさん** 1期・82年来日

自ら起こしたクンタ村のグループ、サムス・セワ・サムハの活動は着実に展開されています。来年はこの地域からビシヨさんという青年を迎えます。

**B・アマティアさん** 1期・82年来日

自宅の3階で養鶏を続けています。現在約80羽。近隣の村に養鶏普及を計画中。

**ラダ・バンストーラさん** 2期・83年来日

ボカラの自宅を開放して編物教室を続けています。今回は毛糸の仕入れを兼ねてカトマンズにできてくれました。もうすぐセーターが日本に届きます。

**サンバ・カヤスタさん** 2期・83年来日

西ネパールのダイレクで住民の健康のための活動を続けていましたが、最近さらには歩いて2時間の村チャティコットに入り、保健活動をすすめています。彼は特定の組織に属さず、単独でこの地に入り村人との間にいい関係をつくり、活動を行っています。

**ニーラン・ガウチャンさん** 3期・85年来日

カトマンズで友人は計画する学校開設の手伝いをしていました。この学校のスタート後は、運営と指導の両方がかかわる予定とか。

今回はスリジャナ・サヒさん（2期）、ビジュヌ・アディカリさん（2期）の2人には残念ながら出会うことができませんでした。

## スリランカ

**ランジット・ジャヤンタさん** 4期・86年来日

村の仲間と小規模農業を続けながら、時折町への出稼ぎも。落ち着くにはもう少し時間がかかりそうです。

**ニーラカンティ・ジャヤコディーさん** 5期・87年来日

2児のママ。今しばらくは主婦業に専念。いずれは女性の自立へ向けて…の期待大。コロンボ郊外に住んでいます。

**アジャンタ・プレマラールさん** 6期・88年来日

篤農家の風貌が出てきています。日本語の辞書作りが認められ週1回高校で教授。ヨーグルト計画は販路確保が難しく、ひと休み。野菜作りに活路を見いだしています。

**ナンダナ・ペマシリさん** 9期・91年来日

中国製トラクター購入。これで耕耘を請負い、結婚資金づくり。このまま村に定着してほしいと思います。

**シャーンタ・ラル・パティラジャさん** 10期・92年来日

帰国後本人の頑張りか村の注目の的。おかげで父親の酒が少なくなり、そんなところでも評価が上がっています。家よりも立派な鶏舎で養鶏をはじめました。

**チャールス・アピクーンさん** 短期・87年来日

父親の代からの地主。村の溜池づくりを通じて地域の民主化の手腕に期待がかかります。

# 第4回林業体験合宿

林業体験や学習会を通し日本の林業の現状や熱帯林減少を考える合宿「枝打」。今回は環境NGO「ウータン」のメンバーを多数スタッフに迎え、また篠山林業事務所の方々はワークショップやゲームなどを指導いただき、より楽しいものとなりました。参加者は10代から50代と幅広かったものの、食事作りなどで打ち解け和気あいあいとした5日間でした。ご協力いただいた大山振興会、丹南町、大山荘の里市民農園の皆様本当にありがとうございました。

やってみなくちゃ始まらない

松田 奈穂

(兵庫・川辺郡・高校生)

私は、今回の枝打ちに参加させていただいたお蔭で、参加者の人達、林業事務所の人達、そして地元の人達からたくさんのお話を学ばせていただいた。

受験生の私は、「実践の大切さ」ということを特に感じた。枝打ちだって、下草刈りだって、苦手の数学だって、やってみなくちゃ始まらない。素人なら素人なりに、苦手なら苦手なりに頑張ってみよう、という気にさせられた。

これはただ机の前に座ってガリ勉していただいているだけではわからないこと。それに農

# PHD NEWS

〈学びと出会いの西日本研修旅行にご参加下さい〉

〈会費・ご寄付寄託状況〉

1994年8月126件	1,508,903円
9月118件	13,455,140円
10月95件	2,016,259円
339件	16,980,302円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄付を頂戴しました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

〈自動車総連より温かいご支援〉

9月27日、自動車総連の福祉カンパ特別寄贈を東京でいただきました。今年で5年目になるこのご支援、温かいご理解に感謝申し上げます。今年も東日本研修旅行で労組の皆さんに研修生がお目にかかります。

〈ありがとうございます〉

ご報告が遅くなりましたが、昨93年度研修事業への支援として、大阪コミュニティ財団（大阪市）、地球市民財団（東京都）よりご協力をいただきました。感謝をもってご報告いたします。

学部志望の私にとって、こういった経験は将来につながる貴重なものだったと思う。

また、参加された方の中にも「仕事に疲れたからリフレッシュしに来た」という人もいて、そんな参加のしかたも又、いいものだなあと思った。田舎には人をホッとさせてくれるものがある。安らぎを求めて都会に暮らす人が田舎を訪ね、自然に触れて素人なりの作業をし気分転換をする。今まで知らなかった田舎を心と体で感じ、あらためて田舎の大切さを思う。PHDはそんなことを気付かせてくれるお手伝いをしていただいたのだと思う。

私も夢に向かって頑張ろうという気がムクムクと湧いた5日間だった。

〈会員拡大キャンペーンご報告〉

9月末に終了いたしました会員拡大キャンペーンに多くの皆様のご協力をいただき、ありがとうございました。キャンペーン用絵ハガキはいかがでしたか？

4月から9月のキャンペーンの成果をご報告いたします。

・新入会員 99名（終身維持会員2名、PHD会員81名、友の会会員16名）

・会員紹介者 17名

・キャンペーンのプレゼントのタイスタディツアー往復航空券は、抽選の結果、以下2名の方が当選されました。

大上恭一様（大阪府）新入会員  
美木朋子様（岩手県）新入会員



「今年もやってきた戸隠へ」

鬼塚二三子  
(神戸市・会社員)

ガタゴト、ガタゴト…。バスに揺られること約7時間。懲りずにやって来ました戸隠へ。今回は7名と人数こそ昨年と比べて減ったけど、パワフルな男女がよくまあこれだけ集まりました。

で、こんな我らを待ち受けるは相変わらずヒゲのよく似合う園長と笑顔の奥さん。そして染色の師匠こと富永楓さん。—こんな豪華なメンバーで、

—なんやかんやの第2回戸隠ツアーが始まったのです。

絹、木綿、Tシャツ、日本手拭い、タオル、みんな思い思いに糸でしぼった布を出してきます。そのわくわくしてる顔といったら！

私は、毛糸の染めに挑戦。木綿や絹などの布は、高めの温度の染料と媒染液に交互につけていけば染まります。しかし、毛糸はこういった工程が違います。染料と一緒に100℃まで沸騰させなければなりません。又、先に媒染液から始めなければなりません。時間もかかります。しかし楓さんの協力も

あり、とてもきれいな色に染まりました。鮮やかなピンク（インド茜）と、こげ茶（栗）。こんなにきれいに染まって、絞っても見事でした。大成功でした。

戸隠での勉強をバネに、みんなで力を合わせてソディーの活動を続けていこうと思いました。又、染めがこんなに楽しいものだと分かったのも、私にとって大発見でした。

最後に戸隠でお世話になったみなさん、本当にありがとうございました。また来年お会いできることを祈りつつ…。

# 〇月×日のPHD協会

**総主事 草地** 海外を含め、各地で入手する資料がたまり、整理のための本棚を所望。数日後、A職員が荒ゴミの山から本箱を発掘してきて、業務命令の早期達成と会計支出ゼロに満足。

**主任主事 藤野** 校長を務める連続講座NGO大学第2回にインドから講師を手配。ペスト禍で予定の飛行機欠航に、当人のインド人に変装案がでて衣装まで揃える

も、1日遅れの来日となり難を逃れる。

**主事補 小松** 結婚後も旧姓を仕事の上では使用中。ダンナと姓が違うことに気付いた最近出入りをはじめた学生K君の「もう離婚はしたんですか」発言に、当人絶句、周囲大ウケ。

**主事補 吉岡** 韓国からの農民交流の一行を迎えて大忙しの折、腹痛、顔面発しんに襲われるも不屈の精神で耐え、賞賛を浴びる。原因が二週間前の豚肉を使った

料理と判明し一転オロカ者扱い。

**主事補 渡辺** 関西の同業団体が集まったの行事ワンワールドフェスティバルでステージの元締め。出演者とスポンサーの間に挟まれ、ギャラ交渉でまたやせる。

**囑託 柳下** ワンワールドフェスティバルにベトナムうどん屋を出店、そのオカミとしてはりきる。はじめ具をサービスしすぎ、終盤は単なるカケうどん状態に。



## 編集後記

求ム/NGOボランティア  
年齢・不問 経験・学歴 不問  
但し・性別 男

最近、NGOの活動に参加していると思うことがあります。「男性が少ない！」ボランティアとして生き生きと動き回る女性は多いのですが、そういう男性の数が女性のそれと比べ、とても少ないのが残念です。「なぜ？」という問いかけに対して、「男は（社会的に

も家庭の中でも）女性より責任が重い（男性自身が）思っているの、仕事以外の事に取り組むのが難しいと思う」という答えが返ってくるのがよくあります。「男女同権」を求めて女性が声をあげ、家庭という殻を破ろうとしているように、男性にも殻を破って出てきてもらいたいと思います。

年齢や国籍によって考え方や感じ方がずいぶん違うのと同じように、性別によってもそれらは大きく異なるのではないのでしょうか。そのため、女性ばかり集まっていると自然に考え方や行動にかたよりが生まれてくるよう

な気がしてなりません。

世界は男性半分、女性半分で構成されています。その世界についてあれこれ考える時には女性ばかりが集まっているのは不自然なのではないでしょうか。（時間的に余裕のある）学生など若い人を中心にもっともっと男性にもNGOの活動に加わって欲しいと思います。レターの編集にもね。

しゅこ&とうこ

〈編集メンバー〉 飯塚 節、井上 裕子、江草 マサ子、  
柿原登志夫、篠原 登子、谷 朱子

新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載しておりません。



初めてのビルマへのツアーは、多くの研修指導者、ホストファミリーの方々にも参加いただいていた。帰国した3名の研修生の活動にたいしても、具体的なアドバイスをいただき、良いフォローアップとなりました。

1994. 8. 9～8. 19

参加者14名

コース：大阪～バンコク（タイ）～ラングーン（ヤンゴン）～マンダレー～タダインシェ村～メィミョー～マンダレー～ラングーン～バンコク～大阪

## 「人と平和を問い直す旅」

渡辺 省吾（兵庫県丹南町・農業・研修指導者）

13年目を迎えているPHD運動の草創期から関り、研修生受入れが長短合わせて25人余り、その国10ヶ国になろうというのに、今年までどの研修生の国も訪れることはなかった。ところが今夏初めてビルマにその機会が与えられることになった。

アジアなどからくる研修生は、等しく日本が忘れた温かい人の心や家族の絆、自然と共生する知恵やしっかりした生きる規範、さらには社会矛盾に立ち向かう勇気などを持っているが、彼らの生きている社会背景を現地に視、何かを収穫したいと願う気持ちの方が帰国後のフォローアップや激励よりも優先する旅であった。

雨期後半とはいえ、マルタバン湾へ注ぐ河口付近の田は一面水浸しで、治水施設が十分整っていない。100年前のイギリス植民地時代以降、ほとんど改善されていないという。水かさの増えることを予想しての農作物の栽培や家畜の放牧。高床の住居構造など長年の知恵がいたるところにみられるが、仕事の能率と生産性、人の健康面を考えると何とかならないものかと思われた。

## 「気長に見守りたい」

一色 作郎（兵庫県市島町・農業・研修指導者）

ヤンゴン、マンダレー市内のホテルでは、頻りに停電があり、大雨により冠水する道路や鉄道が多く、交通手段は貧弱である。国家予算の中に占める軍事費の割合が高く、人々の生活は豊かであろうはずが無い。人々の表

情は案外明るく、非常に親切である。ミャンマーの農業は、丁度日本の大正の終わりから昭和の初めくらい水準であろうと私は思われた。

独特のデルタ地帯で、灌漑用水や排水路等は整備されていない。稲の収穫をしているかと思えば、隣の田では、田植えの最中であり、長粒種の二期作である。

今回の目的はウィンさんをはじめ、3人の研修生のアフタケアである。村の農民に集まっていたいて、いろいろと話を聞き、いくつかの提案もさせて頂いた。米の収量は二期作とはいえ、まったくの粗放栽培であるから極めて低収量で、市価の八分の一位で国が買い上げるそうである。しかも、米以外の作物を作ることは、禁じられているようである。また、現状の作付け体系を続けると、村の人々の雇用に影響が出るようでもある。厳しい環境の中で、PHDの研修生は、いろいろな試みをはじめているが、性急に効果を期待するのではなく、気長に見守り、応援をしていきたいものである。

## 「心通わず交流」

市村 惇（大分県耶馬溪町・農業協同組合職員・研修指導者）

8月16日夜ビルマ、ミャウタダインシェ村の特設の演芸会場は会場一杯の村人で埋まった。ティンアンウィンさんの指導する民族芸能（音楽や歌とおどり）が披露され、私達の一行も紹介され「チューズテンパーデー」（ありがとう）の大合唱が繰り返され、日本の童謡「はるがきた、はるがきた、どこにきた・・・」の歌声が会場いっぱいにこだました。

この夜の交流は村の人達と私たちの心を通い合わせる又とない機会となった。

貧しい村の実態は想像以上にひどかった。教育・文化・衛生この遅れを早く取り戻してほしい。政治の果たす役割が大きい。圧政に抗して民主主義が働く人たちのものになることを心から願った。その活動ははじまっている。

## 「父の眠るビルマ」

渡辺 昌美（兵庫県丹南町・農業）

今回のツアー参加は母を父の戦死した地へ連れて行くことが大きな目的となりました。父はビルマ、トンク県、レジにて、シタン川を渡るために筏を組んでいる時攻撃されて戦死しました。母は二十代で父と別れて今年で50年になります。男の仕事も女手でこなし農業をしてきました。生き抜く力が強くなった分、辛く苦しい年月であったのだと思

# 地道な活動始まる

## ビルマスタディツアー

います。トンク県で母と同年のおばあさんに当時の話を聞くことができました。安住の地を戦場にして迷惑をかけたにもかかわらずいやな顔もしないで淡々と話されて、母の膝にそっと手を差し延べて下さいました。それは言葉を越えた慰めでした。

父が渡りたい一心で渡ることができなかったシタン川も小さな船で下ることができました。着いた所は川幅が最も狭い渡河点で日本兵の墓地があった所でした。今では田んぼに変わっていましたがそこで現地の人々と共にお線香をあげて慰霊を慰めることができました。それはどう表現すればよいのか分からないほど感激でした。母も50年の念願が叶い真心ある人々にふれて凍結していた心が和んだようです。戦う国も戦場となる国も共に犠牲者です。同じあやまちを繰り返さないためにも戦争の傷あとをしっかり見つめて自覚を持って平和を願いたいと思います。

## 「来てよかったビルマ」

前川 三子（兵庫県丹南町・農業）

道中無事でラングーン空港に着き研修生の皆さんが迎えに来て下さっているのを見た時、「ああ、来てよかった」と思った。毎日あちらこちらと連れて行ってもらい驚くばかりでした。シタン川へ連れて行ってもらう川が大きくてびっくりしました。思わず主人に「おとうさん御苦労さんでした」と言えた。土をもらって来てもらった時も主人に会えた気分がしました。

日本人が戦場にして悪いこともしただろうに、ビルマの人は親切な方ばかりで感心しました。村の人や又多くの人に御供養をしていただき、さぞかし主人も嬉しかっただろうと思いました。

## 「真の国際化とは」

加藤 博智（兵庫県西宮市・学生）

このツアーに参加して「国際化」との言葉が、とても重く広く思うようになった。ミャウタダインシェ村での生活は、村の人たちが、私たちをとても大事にもてなしてくれました。ここまでのもてなしをしてくれるのは、PHDの活動で研修生を日本へ呼びミャウタダインシェ村を良くしよう、そしてそこからビルマを良くしていこうという今ま

での積み重ねからくるものであると思った。ビルマで会った3人の研修生の人たちは本当に自分の村の事、村の人々の事を考え、ビルマを変えて行きたいというしっかりとした考えを持って行動しているとても素晴らしい人達だった。

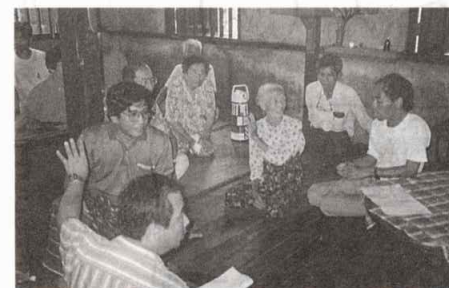
一人一人が出来る事には限りがあるかもしれないが、その一人が一人に、そしてまた一人に伝える事ができれば点から線というように、無限に可能性が生まれるのではない。

今回のスタディツアーで私は真の国際福祉とは何かと考えるチャンスを与えられたと思った。

## 「話したかったけど」

落合 厚志（兵庫県伊丹市・滞在家庭・小学生）

トゥンティンさんのおばさんの家に行った時、「へえ、こんなふうになっているのか？」と、思った。おひるごはんを食べに



村人から戦時の話を聞く参加者

行った家の人は、やさしかった。だって、入った時にすぐ、パイナップルを、大きなおさらに山盛りいれてだしてくれた。はじめは話せなかったし、こわかった。でも、だんだん恐くなって来たり、しゃべれるような気もしてきたけど、しゃべれなかった。

## 「楽しく村の子と遊ぶ」

落合 輝紀（兵庫県伊丹市・滞在家庭・小学生）

町では子供がお金をくれと寄ってきたけど、村ではみんな楽しそう、人は集まって来て、いっしょに遊ぼうと来てるようで、いっしょに楽しく遊んだ。行く前から楽しみにしていたサッカーもできた。

村の学校にも行った。みんな折り紙をし

た。ぼくはシュリケンも教えてあげた。みんなすぐには出来なかったけど、ぼくよりていねいに折っていてきれいだった。

二日間村の子と遊んでみて、日本の子と遊ぶよりも楽しかったし、遊ぶ

ものはないけど楽しそうだった。

## 「できるのは心の応援」

落合 久恵（兵庫県伊丹市・滞在家庭・主婦）

村では農業の組合を作る準備も始まっている。それに衛生状態の改善も必要だ。ウィンさん達のやりたい事が痛いほど伝わってくる。来年の研修生も決まった。現在の政治の状態や文化の違い等、困難な状況に囲まれているビルマ。そんななかでも、村人達が少しでも希望をもって働けるようにとがんばっている彼ら。私達は、どうしてあげることもできないけれど、この人達を知っているという事で、心の応援はできるのではないかなと思う。今回のツアーで、来てくれて本当にうれしかったと言ってくれたその言葉が、私にはまた宝物になった。

## 「ビルマに来たんだなあ」

落合 修（兵庫県伊丹市・滞在家庭・会社員）

こんなに早くビルマにいけるとは思ってもいなかったのですが、PHDからビルマへのスタディツアーの話を聞いてからは是非行きたいと思っていました。ウィンさんとは1年半ぶり、トゥンティン君やムームーさんとは半年ぶりの再会になります。

ヤンゴンの飛行場にはウィンさん達が来ていると聞いていたので送迎デッキの上で大きく手を振っている3人を見たときは、本当にビルマに来たんだなあと思いました。

村の小学校では50%以下の就学率とのことでしたが、みんな一生懸命勉強していました。日本への絵入りメッセージを書いたり、折ったり、折り紙をしたり、即興の「むすんでひらいて」をみんなで歌い踊り、楽しいひとときを過ごしました。

## 「一日が二日分」

若林 元（岡山県東粟倉村・中学生）

村の暮らしはとても貧しく、家は屋根だけヤシの葉を使っていました。仕事は主に農業で、たいていの家が牛を飼っていました。また水牛を飼っている家もあります。

村の中にはトイレの無い家もあるそうです。また、風呂もないので、井戸で水浴びをしています。テレビのある家は数少ないです

が、人々は貧しい暮らしをしているようですが、みんなとても明るく、伸び伸びしていました。とにかく一日が二日分もあるようでした。

## 「ビルマに行って」

工藤 久美子（神戸市・滞在家庭・主婦）

ビルマのある村の洋裁や編み物が出来る人たちは、決してその技術を人に教えない、という話を聞いた。洋裁等の本も殆ど無く、ましているいろいろな技術を習得していれば、それだけで結構なお金になるからだそう。またもう一つ、ビルマのある村の人達は、自分達の持ち米の中から一握りだけ持ちよってひとまとめにし、その村の貧しい人、未亡人、一人暮らしのお年寄り等に分けている話も聞いた。村人自身も貧しいのでたくさん分けることはできないが、今日炊く米の一握りであれば、それ程減った感じもしないし、数が集まれば結構役に立つだけになるという。この二つの話を聞いた時、わたしは人間としての生き方を考えさせられた。

私は前者の人を責めることはできない。その人達が洋裁などの技術を習得するのにきつ



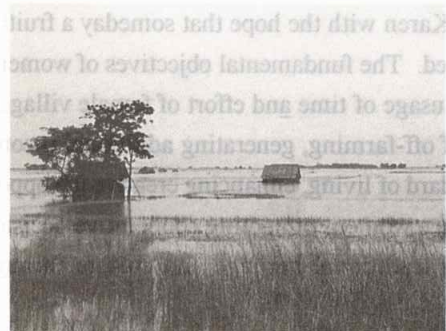
日本での指導者がビルマで指導

と大変な努力をしたらさうから。しかし、この寂しい気持ちはいったいなんだろう。後者の話を聞いて、とても心が満たされるのはどうしてだろう。私としては、どうしても後者の生き方がしたいと思った。そして、この二者の違いは、たった一つ「分かち合う心」があるかどうかにかかっていると感じた。

## 「小さなつながりだけで」

佐藤 真奈美（大阪市・英語教師）

村での生活においても、当初は、先進国の人間が押し掛け、ただのお祭り騒ぎに終わってしまうのではないかと戸惑いもありましたが、一緒に食事をし、何とか言葉を交わそうとし、お互いに共有する時間を大切にしようとする気持ちを通わせることで、いつの間にかそんな余計な思いは消えていってしまいました。ビルマの中の小さな村と、ごく少数の日本人とのつながりは、小さなものだけれどもとても大きな意味を持つものであると確信しています。



灌漑が悪く水浸しの田